研究会シリーズ≪創造の場へ≫

第1回　7月1日（金）

映像と舞台芸術をめぐる問い（1）

〈しるし〉と〈うつし〉

映像によって舞台空間はどのように記録され、複製され、再現されるのか。舞台作品の記録、あるいはその映画化の具体例を参照しながら、複製技術時代における舞台芸術について考える。

第2回　7月8日（金）

映像と舞台芸術をめぐる問い（2）

〈おもて〉と〈からだ〉

うつしとられた身体は何を語るのか。写真や映画による身体表象の分析を中心に、イメージと実体、フィクションと現実の関係を捉え直し、舞台芸術の現代的条件と、劇場的思考の可能性を探る。

会場：映像ホール
京都造形芸術大学 人間館地下1階

18：00～19：30
（両日共に）

申し込み不要
（当日会場に直接お越しください。）

主催・問合わせ
京都造形芸術大学　舞台芸術研究センター
tel:075-791-9207　fax:075-791-9438
mail:k-pac@kuad.kyoto-art.ac.jp

講師

八角聡仁

1963年生まれ。批評家。近畿大学文芸学部教授。京都造形芸術大学舞台芸術研究センター主任研究員。演劇、ダンス、写真、映画、文学などに関する論考多数。編著に『現代写真のリアリティ』(角川学芸出版)ほか。

司会＋コメンテーター

森山直人

1968年生まれ。演劇批評、現代演劇論、表象文化論。京都造形芸術大学舞台芸術学科教授、同大学舞台芸術研究センター主任研究員および同センター発行の機関誌『舞台芸術』編集委員。京都芸術センター主催事業「演劇計画」企画ブレーン(2004～)。論文に「過渡期としての舞台空間 - 小劇場演劇における「昭和30年代」」、「〈ドキュメンタリー〉が切り開く〈舞台〉」、「分断と共感 - 東京国際芸術祭「中東演劇シリーズ」を振り返って」等。

舞台芸術研究センター研究会シリーズ《創造の場へ》では、舞台芸術の未来を考察するさまざまなトピックを取り上げ、内外のアーティストや批評家、研究者、プロデューサーを講師に招いて、舞台創作の現場と理論とを有機的に結びつけるレクチャーとディスカッションを開催していきます。ここでの議論の内容は、本年度よりリニューアルする機関誌『舞台芸術』の内容とも密接にリンクしていく予定です。

第１回、第２回は、舞台芸術と映像の原理的な関係性を中心に考察していきます。２０世紀以降今日までの世界の文化状況は、映像文化の爆発的な普及と技術革新の歴史と深く結びついており、「舞台芸術とは何か」という問いをめぐる思考と実践も、そのことと無関係ではありえなかったはずです。にもかかわらず、両者の根源的な「衝突」と、それが生み出したものが何であったのかという問題は、特に日本においては、いまだに十分な検討の場を持っていないように思われます。八角聡仁さんをゲストに迎え、２回に渡って開催されるこの研究会では、こうした問題にどのようなアプローチが可能なのかを、できるだけ幅広い事例を具体的に参照しながら考えていきたいと思います。このトピックに関心のある方のご来場を心からお待ちしています。

森山直人（舞台芸術研究センター主任研究員）